

# 神道思想の研究

—日本古代国家誕生と和の思想—

武 光 誠

## はじめに

「神道」のとらえ方は人によってまちまちであるが、私に「神道」和の心」と呼ぶべき古代から現代に連なる「日本思想の核」について論じることとする。これは「神道を科学思想としてとらえる」立場をとるものである。本稿では科学思想を、「ある時代の人間のもつ、自然界に関するすべての知識」と定義しておこう。<sup>1)</sup>

本稿は神道を一つの科学思想ととらえたうえで、神道つまり「和の心」に合理的な考察を加えたものである。それゆえこの後の部分で「こういう考え方もあるが、それとは別のこのような考えも可能だ」という書き方しできない箇所も多くみられることをあらかじめお断りしておきたい。

## 一 「日本」誕生と神道

天武天皇の治世にあたる七世紀末は、日本古代史上の重要な転換期であった。その時代に「日本」の国号と天皇号がつけられ、中国風の官僚制度が完成したのである。

現代まで受け継がれた神道の大枠も、「日本」の国号が出現するまでの日本古代史の流れの中で完成した。

神道の大本とは縄文人の思考に求められる。縄文人はあらゆる生き物が善良な靈魂を持つているとする精霊崇拜（アニミズム）の発想にたった社会をつくっていた。

どの民族も、きわめて古い時代に精霊崇拜の段階を経験したといわれている。精霊崇拜は、自然の恵みと、生活を共にする仲間への感謝の気持ちから生じたものだ。

別稿で論じたことだが私は、縄文時代の考古資料は、縄文人が次の

三つの特性からなる「円の思想」によって生きていたことを物語るものであると考えている。

- ① 自然を大切にすること
- ② 人間を大切にすること
- ③ 明るい気持ちをもって人生を楽しむ

縄文人はより良い社会生活を送るために、みんな「円の思想」をつくり、その考えにたつた神々を祭ったのであろう。

ここにあげたように縄文時代の円の思想は、現代の神道にも受け継がれた。そのため現代の日本に、住民が主体になった楽しい祭礼が多くみられることになった。

弥生時代に稲作が広まると、人々は農地をひらいてくれた祖先に感謝して祖霊信仰をつくった。多様な精霊を祭るなかで、

「祖先の霊魂が集まったものが精霊の世界の指導者になる」

とされたのだ。この時代には現代のような家ごとに自家の先祖を祭る形ではなく、一つの集落や地域の住民すべてが自分たちすべての祖霊の祭祀を行う形がとられた。このような祖霊の集合は、弥生時代中期の終わり、つまり二世紀なかばから大國主命などの国魂と呼ばれる土地の守り神となつていった。<sup>③</sup>

朝鮮半島から青銅器や鉄器が伝わったことによつて、紀元前一世紀末に、弥生時代中期が始まった。弥生時代中期は、人口数百人から二千人程度の小国が各地に広がつていった時代であった。小国は、青銅器、鉄器などを入手するために組織された交易国家であった。

交易国家では、交易を主導として人びとを豊かにしたものが尊敬さ

れて首長となつた。しかし、首長の能力が衰えると、人々は別の者に首長に立てた。古代の日本には外敵の脅威がない。そのため日本では古代中国や古代オリエントのように軍事的指導者が国を治めることがなかつた。

「珍なる物を賞でる」国といわれた日本は、意欲的に外来の文化を取り入れた。それゆえ、未知の文化や情報を持つ外来者は日本では「まれ人」として歓迎された。

「魏志倭人伝」から弥生時代の日本人が、陽気な生活を送っていたありさまが伝わってくる。そこには三国時代の宮廷のような陰湿さが全く見られない。

「記紀」や『万葉集』の和歌には、言霊信仰にたつて縁起の良い言葉や並べたものが多いが、「記紀」がまとめられた奈良時代に似た祭祀が行われた弥生時代にも言霊信仰がとられたとみてよい。

言葉が霊力をもつとする言霊信仰は、正直さを重んじる文化を作る。嘘をつく者は神罰にあうとされるからだ。祝詞は自分の気持ちを素直に述べたものだ。日本人は祈りの言葉の中で自分を正当化しない、そのため論理や法は胡散臭いものとされて、神道は戒律のない宗教となつた。国魂信仰の発展の中で三世紀に国魂を祭る首長の先祖の霊魂が神々の世界の霊魂の指導者とする考えが広まった。これが、首長霊信仰である。<sup>④</sup>

首長霊信仰は、六世紀はじめの継体天皇のもとで皇室の首長霊、天照大神を他の首長霊の上に置く信仰として完成する。現在でも、伊勢神宮の天照大神が、日本全体の守り神とされている。そして天照大神

に従う首長霊である吉備氏の祖先を祭神とする吉備津彦神社や、秩父国造の祖先を祭る秩父神社が、一つの地域の氏神として重んじられ続けている。

大和朝廷が誕生した三世紀はじめにできた首長霊信仰の発想が、現在まで受け継がれているのである。

大和朝廷の王家には、「武力で地方の首長を従える」という発想はなかった。戦いによって国がまとめられていたと仮定すれば、日本は卑弥呼の時代にあたる二世紀末ごろに統一されていたのではあるまいか。

古代日本の首長たちは、他の首長が神の祭祀を通じて治める集団の自立を最も重んじた。しかしかれらは、自分より高度な文化を持つ者を上にたてて優れた文化を取り入れる柔軟性も持っていた。

大和朝廷は積極的に大陸の先進技術を取り入れ、それを地方の首長に気前よく与えて地方の首長を従えてきた。国内の広い地域にわたる三角縁神獣鏡の分与はその典型的な例である。大和でつくられた三角縁神獣鏡が、多くの地方の首長に与えられたのだ。

これは古代日本の考古資料や文献に関する一つの解釈に過ぎないが、私は日本は話し合いによって統一されていったと考えている。もとは自立した交易国家であった各地の首長たちの小国が、三百年間という長い期間をかけて大王のもとに組織されたのである。

しかし藤原京、平城京に中央の貴族政権がつけられたのちにも、郡司となった地方豪族の自治権はかなりの部分まで認められていた。

六世紀はじめに天照大神という国魂よりはるかに格の高い神ができ

たあと、豪族たちが祭る神々は次第に天照大神の親戚筋や家来筋の神とされていった。「古事記」などの神話の神々の系譜は、天照大神を中心に構想された神々の世界の秩序の完成形であると評価できる。

それと共に天武天皇の時代の前後に、祈年祭や大祓などの天皇主導の全国規模の祭祀の整備がなされ、中央の神祇官が成立していった。これは

「天皇は日本全国の神々を祭る君主である」

「天皇の祭祀を受ける神社とその分社の祭神だけが、由緒正しい神様である」

という発想の確立を意味するものであった。<sup>⑤</sup>

## 二 神道思想の発展

これまで説明してきたような形の天皇を中心とする神道は、日本人々が知恵を集めて、自分たちのもつとも住みやすい社会を模索した成果から生まれたものと評価できる。その営みによって朝廷のもとで、

「天皇にも地方豪族（首長）にも、その下の庶民にも最も良い形が日本を統一する方法」

がつくり上げられた。

このような国の君主は「神様に見放されるような悪政」はできなくなる。

古代の世界には、ローマ・中国などの専制君主の支配がなされた国も多い。そこでは一神教やゾロアスター教の二元論の神が、君主の権

威を高めるために用いられた。

それとは反対に、オセアニア、アフリカ中部などでは近年まで精霊崇拜にもとづく社会が存続した。そこでは人間にやさしい社会がつけられたが、一国のまとまりはなく、概して文化は遅れたままであった。

これに対して日本は天照大神信仰をつくり、精霊崇拜の要素を残しながら国をまとめ、外来の文化を取り込んで発展していったのである。<sup>(6)</sup>

六世紀初めに日本に伝わった陰陽五行説はすみやかに神道に取り入れられた。それに次いで日本に広まった仏教も、平安時代はじめ頃に神仏習合の形で神道と一体化した。豪族たちが、自分の領地の氏神となる神社に真言宗や天台宗の僧侶を招き、かれらのもつ知識を民衆に役立てようとしたのだ。

平安時代半ばに村落の小領主である武士が出現すると、神社の祭りは地方豪族から武士に代わった。中世武士の時代は江戸幕府成立まで七百年近く続いたが、この時代の日本はヨーロッパや中国に比べてはるかに平和であった。

武士たちは本心で平和を望んでいた、かれらは争い事を話し合いで解決しようとして鎌倉幕府や、室町幕府とその下の守護大名をつくった。神社の祭り手である村落の小領主は、円の思想の流れをひく神道思想にたつて、自分が祭る神とは異なる神の祭り手である他の武士との協調を心掛けた。<sup>(7)</sup>

戦国大名が現れると、自立した小領主であった武士は、城下町に移

住して大名の家臣になった。そのため村落の小領主の代わりに、専門の神職や農民の集団が神社の祭り手になった。

江戸幕府のもとで国内の平和が実現され、安全な交通網が整備された。

この動きに伴って、村落の神社（氏神）ごとにまとまっていた人々の目が全国規模に広がった。

この流れの中で、先進地である都市から御利益を求める流行神信仰<sup>はやりがみ</sup>が生まれた。さらに、誰もが「氏神を中心としたまとまり」を当然のものとした時代が終わった時に、朱子学者の中から儒家神道が起こった。これは神様のことを合理的に説明づける試みと評価できる。

儒家神道を代表する林羅山は『神道伝授』で次のように記している。

「心ハ神明之舎也。舎ハ家也。タトヘバ比身ハ家ノゴトク、心ハ主人ノ如ク、神ハ主人ノタマシキ也」

「神道ハ即理也。万事ハ理ノ外ニアラズ。理ハ自然ノ真実也」

「未生<sup>みしょう</sup>以前ハ神也。是<sup>これ</sup>過去也。出生シテハ人也。是<sup>これ</sup>現在也。死後ハ又神也」<sup>(8)</sup>

羅山は、神は人の心の中にいると主張し、神は自然を秩序づける理であるとした。このような羅山の説明は、現代人の目から見てもきわめて理に叶ったものと評価できる。このような儒家神道は、江戸時代末まで知識層に大きな影響を与えた。

江戸時代後期に、人間の手で「和の心」を実現しようとする粋の哲学にたつ文化がつけられた。<sup>(9)</sup>

粋の発想が広まる中で、日本に見知らぬ者どうしが明るい気持ちで

互いに支えあえる社会が形成されていった。しかし日本の社会は幕末の西洋の圧力による開国によって一変した。

開国のあと人情を重んじて弱者を支える日本人と、法と論理を第一に考える強いもの勝ちの西洋人との紛争が多く起こった。拠って立つ科学思想が異なる者どうしが、理解しあえるわけではない。

幕末には生麦事件のような、攘夷主義からくる紛争が起きた。しかし、それでは何の解決にもならない。

産業革命を経た十九世紀末の西洋の科学技術は、当時の日本の科学技術よりはるかに進んでいた。そのために幕末の混乱をおさめたあとにできた明治政府は、西洋流の法の支配を取り入れた。すべての人間に通用する理性が存在すると説く近代哲学を学び、キリスト教の布教を許す方針を取らざるを得なかったのだ。

攘夷主義者は

「粹を受け入れられない外国人を、日本から排除せよ」

と主張していた。しかしその考えは蒸気船を用いて安全に日本と欧米を行き来する時代には合わなかったのである。しかし、幕末の攘夷主義で表面化した「日本人は、日本人と異なる科学思想にたつ人々と、どのように関わるべきか」という問題は、明治維新以後も解決できずに来たように思える。

「日本は表面的に西洋化しても、日本人は西洋人と全く同じ発想に成りきれない」のであろうか。国際化がすすむ現代に、日本人は何をなすのが最善の選択になるのか。私にもその問いに対する答えはみえていない。

### 三 脳科学からみた神道

近代以前の西洋やイスラム圏の歴史を知れば知るほど、「一神教と多神教とは、根本的に異なる」ということがわかってくる。開国以前の日本人と、西洋人やアラブ世界の人々は、全く違う科学思想に立つ倫理（道徳）に立って生きてきた。

世界規模に広がっていた一神教は、精霊崇拜を否定したうえにつくられた。しかし日本では、現在でも縄文時代の円の思想以来の精霊崇拜が生きている。

日本人はいろいろな神様がいるのを当然とみる。そのために自分と違う考えの人間の存在も受け入れて、人間や動物の生命を重んじ、多様な人間が仲良くする人にやさしい世界をつくろうと考える。

ところが、一神教では真理は唯一のものであるとされる。だから、一神教の世界の指導者は、ただ一つの真理を追究し、その真理に反する者を弾圧する。

一神教と多神教の違いが生じた理由に関する説明の一つに、それは「森林の思考」と「砂漠の思考」の違いから来るとする地理学者の鈴木英夫氏の説がある<sup>⑩</sup>。

森林では、容易に水や食料が得られたので多様な考えがつけられた。これに対して砂漠では、水を見つけて生きるのは唯一の真実を掴むのに近い労力を有したというのだ。

この見通しは、おおむね当たっているであろう。ゆえに私はキリスト教などの一神教を「砂漠で生まれた思想」、神道などの多神教を「森

で生まれた思想」と呼んでいる<sup>11)</sup>。しかし、その基礎となる「森で生まれた思想」「砂漠で生まれた思想」と呼ぶべきものに、その民族の数多くの思想家の考えが加わって一つの民族の思考がつけられたとするのがより妥当である。だから、同じキリスト教にたつものであっても、イギリスの思想とフランスの思想はかなり異なるものになった。

日本人は、他の民族のもつ優れた点を多く学んで、日本文化を作りあげてきた。日本では「職人芸は見えて覚えよ」とされた。勤に頼って仕事をする職人は、それを論理的な文章にして弟子に教えられない。

これに対して唯一の真理を追究する近代のキリスト教圏の学者は、自分の説を理論づけて説明して人々を納得させてきた。論理を重んじる発想は、近代哲学をひらいたデカルトの学説をきっかけに急速に広まり、ニュートンに始まる近代科学（物理学）を生み出した。

現代の科学技術の多くは、近代科学に拠るものだが、幕末の西洋諸国の接近がなければ、日本人はかなり後まで手作りの火縄銃を作るだけで満足していたかもしれない。

現代の一神教の信者の科学思想と多神教の信者の科学思想の違いは、どのような経緯でつくられたのであろうか。心理学者の多くは、こう考えている。

「ある人間がどの言語を話して、どの宗教を信じるかは、その人の育った環境によって決まる」

個々の人間の宗教心は、教育によってつくられるというのである。これは、おおむね妥当な想定であろう。確かに日本人の子供の多くは日本語を話し、親に従って神社にお参りする。新渡戸稲造や小泉八雲

のような例外については、後で詳しく説明しよう。

最近急速に発展してきた脳科学の成果も、このような心理学者の想定裏付けになりえるように思える。そのあたりの脳の仕組みを、きわめて単純化したかたちで示しておこう。

人間は、大脳にもたらされた情報をもとに行動するといわれる<sup>12)</sup>。大脳は大脳新皮質（しんひちつ）と大脳辺縁系（へんえんけい）に大別される。そして視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚などから人間が得たあらゆる情報は、全身の神経細胞を経て、いったん大脳辺縁系の中の海馬（かま）に一時保管される。海馬は、それらを整理したものを、認知や記憶などの高次なはたらきをつかさどる大脳新皮質に送り込む。情報の伝達は、脳内伝達物質と電気信号で行われる。

大脳新皮質は左脳と右脳に分かれるが、左脳と右脳はともに前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉、四つの脳葉から成っている。これらの八つの脳葉にはいくつもの領野があるが、その中の思考や言語などの精神活動にかかわる最も重要なはたらきをするのが連合野である。

前頭連合野（前頭葉の連合野）は、主に記憶をもとにとるべき行動を決める。側頭連合野は、主に海馬から来た情報を長期保存する。頭頂連合野は、主に受け取った感覚をもとに体にそれに応じた行動をとらせる。後頭連合野は、主に視覚情報を処理し、長期計画の上に立つ未来の望ましいあり方、野心とでも呼ぶべきものを考え出す。

前頭連合野が、側頭連合野にある情報をもとに人間の体にさまざまな指令を出すのである。だから脳科学の考えでは、神道に関する情報が海馬に入っていない者は神社でどのような作法をとればよいかわか

らず、キリスト教の情報をもたない人間は教会に行っても正しい行動をとれないということになる。

人間の宗教心は、側頭連合野のもつ情報をもとに決められるのであろうか。しかし、人間の脳のはたらきは、きわめて複雑で一筋縄でいれない。記憶の良い人間は、側頭葉が発達しているという実験結果もある。この側頭葉は物事を考えたり覚えたりする学習の繰り返しによって発達していくといわれている。

ゆえに似たような育ちの人間であっても、学習して側頭葉を発達させた者とそうでない者とは、違った宗教観をもつことになる。

前頭連合野は、人間の自我にかかわる機能をもち、善悪の判断を行う。善悪の判断に関する能力は、前頭連合野の鍛え方によって違ってくると思われる。

子供の時から正しい行動をするように心がけていると、前頭連合野が成長し、高い倫理観をもつことになるのである。

人間の側頭連合野は、他の動物の前頭連合野よりはるかに大きい。だから人間は、発達した前頭連合野で他の動物がもたない高度な思考を行い、優れた創造力をもつ。人類の誕生から現代にいたるきわめて長い社会生活の中で、人間は前頭連合野を発達させて道徳心をもつようになつたとされる。十代までの若者は、前頭連合野が十分に発達していないため、時に衝動的な行動をとるといふ。また、前頭連合野には、恐怖の記憶、忘れたくない記憶をけすはたらきがあるともいわれる。<sup>15)</sup>

前頭連合野のはたらき以外にも、脳の注目すべき機能は多い。神経科学者のマーカス・レイクルは、脳が活動していないときに働いてあ

れこれ考える潜在意識(デフォルトモードネットワーク)に注目する。前頭連合野ではなく、この潜在意識がより多くのものを創造するというのだ。

神経科学者でサイコパスの研究をしているデヴィッド・イーグルマン<sup>16)</sup>は脳のさまざまな腫瘍が人間を犯罪に導くという。

大脳の下に位置する脳幹の中に人間の本能からくる欲望をつかさどる視床下部<sup>しょうか</sup>がある。これが大脳辺縁系の扁桃核<sup>へんとうかく</sup>に送る信号によって、扁桃核は個人の欲望にもとづく好き嫌いの判断を決める。

人間は扁桃核の指令どおりに行動してしまつと、おおむね破滅する。だから、前頭連合野が、扁桃核の暴走を抑えて人間社会に適応した行動をとらせる。

ところがイーグルマンが、大学で銃を乱射した人間を調べたところ、彼の扁桃核に腫瘍ができていたことがわかつたという。さらに、イーグルマンは性犯罪を犯した者の前頭葉に腫瘍があつた例もあげたうえで、脳の病気がサイコパスの行為とされる犯罪を引き起こすという。

申し分のない善人が脳の病気にかかると、残酷な犯罪者になるとすれば恐ろしい。科学的に解明される前は、それは悪霊の仕業とされたのかも知れない。

神経経済学者のポール・ザックは、脳内にオキシトシンという脳内伝達物質が多く分泌されると人間の共観力が高まるという。オキシトシンは人間の信頼感、寛容さを高め、善行を行わせるのだ。結婚式の時の花婿、花嫁を調査したところ、彼らの脳内のオキシトシンの量が平均的な人間のもつオキシトシンの量よりはるかに多かつたとザック

はいう。

脳科学の最新の説に従えば、すべての人間の脳が異なる個性をもっていることになる。これは主に、ある人間がどのような情報を大脳の側頭連合野に貯めてきたかによって決定される。幼いときから上品な情報を大脳に貯めてきた人間の脳は上品になり、下品な情報を貯めた者の脳は下品になる。

そして一人一人の人間の独自の思考回路を持つ脳が、それぞれの体に指令を出すのである。このように考えてくると、「人間の宗教心はすべて脳のはたらきでつくられる」ということになりそうである。しかし現在の脳科学の研究は、ようやく長い道のりの入口に達したあたりに位置している。

今後の脳科学の予想外の発展によって、本稿で記した推測とは全く異なる真実が明らかになるのかもしれない。

脳科学以外の研究者の成果のなかに、脳科学と関連付けて考察すべきものもある。心理学者のジェシー・ペアリング<sup>17)</sup>が、人間の宗教心を知るうえで、きわめて興味深い実験結果を発表している。

実験によってチンパンジーは、物体の重さがわからずに、人間の表情がよめず、抽象的な概念を全く理解できないことが明らかになったというのだ。

これに対して人間の子供は、三歳前後になると人の表情を読み取ったり、自分の身体と他人の身体との違いを認識するという。そしてこの年齢の子供に、天使の絵を見せて、「目に見えない偉い人がいる」と説明した場合に、子供はその話を十分に理解できる。とペアリング

はいう。

彼はチンパンジーや子供に同じ大きさで重さが異なる箱を持たせたり、声を発せずに表情だけであれこれ指示して、それに対するチンパンジーや子供の反応を調べた。天使の絵を飾った部屋では、幼い子供が親などの身近な年長者がそばにいるときに似た行動をとったという。

人間はチンパンジーのものよりはるかに進化した前頭連合野をもっている。人間はこの前頭連合野がある程度成長した三歳のころに抽象的な概念を理解して宗教心をもつようになるのであるか。

認知情報論の研究者の石川幹人氏<sup>18)</sup>は、超能力、靈感などといわれる「超常現象」をあれこれ分析して、その多くが潜在意識(デフォルトモード)の創造性によるものであるとする。脳科学で潜在意識と呼ばれるものを知らない人間が、自分自身の潜在意識で得た知恵を、「靈魂のお告げ」などと感じたのであろうか。

ここにあげた脳科学以外の分野からのさまざまな研究成果は、「宗教心は脳のはたらきとして解釈すべきものである」とする説を裏付ける可能性をもつものだと評価できる。

#### 四 社会構成主義と神道

「宗教は人間の脳によって作られたもの」とする説明は魅力的ではあるがこれとは別の方向から宗教を科学的に説明付けようとする試みもある。その一つは「かつて神の司令によるものと考えられていた人

間の献身的な行為は、遺伝子（DNA）の働きからくるものである」とする一群の研究である。

生物学者の多くは遺伝子は極めて利己的なもので、多数の自分の複製を残すために生物の身体を操り、自己保存と生殖に全力を注がせる。この遺伝子がときには生物を進化させると考える。

これに対して遺伝子学者リチャード・ドーキンスは、個々の生物は時として遺伝子の指令で身内の利益のために自分を犠牲にして利他行為をするという新たな説を発表した。ドーキンスは、自分が属する群れが外敵に襲われたときに、群れの中から命を捨てて敵の獲物になって仲間を救う者が出るという。

これは、利己的な遺伝子の利益にかなう行為だとドーキンスは言う。ドーキンスのあと利己的な遺伝子をめぐって、様々な研究が出された。<sup>(20)</sup>しかし遺伝子研究は、ようやく本格化したばかりであるため、現在の時点では「利己的な遺伝子」といった想定の可否をつかみ難い。

これとは別に、サイコパスを起す遺伝子を扱った神経科学者のジームス・ファロン<sup>(21)</sup>の研究がある。彼はサイコパスを発生させる40の遺伝子を発見したと言う。全人口の約3%がこの遺伝子を持っているが、多くの人は教育によってサイコパスの遺伝子を抑える知恵を得ると言う。

脳科学の説明を用いるなら、前頭連合野を成長させて高い道徳性を持つように心がけてきた者は、サイコパス的発想による犯罪に手を染めないということになるのであろう。

人間の霊魂と量子の働きを関連付けた量子脳理論というものもある。

る。

理論物理学者のロジャー・ペンローズ<sup>(22)</sup>は、不完全性定理<sup>(23)</sup>を踏まえて脳内の不可解な動きを見ていく中から、脳の神経細胞（ニューロン）中の微小管が量子コンピューターの役割を果たしていると考えた。

ゆえに個々の人間の脳細胞の中の電子は絶えず体内から出て他者の脳と行き来するとともに、ときには遠い宇宙までも達すると言う。この量子が不滅の霊魂だとペンローズは説くのである。

また理論物理学者の刑部眞里氏・保江邦夫氏<sup>(24)</sup>は量子論に沿った上で、人間の脳の中の膨大な数の電子と光子が集まってできたものが霊魂であるとする。

このような量子としての脳は、タンパク質からなる物質としての脳とは別物で、身体から遊離して存在する一塊りのものであると彼らは考える。しかし量子論自体は理論的に正しいとみられるが、二十世紀はじめから現在まで研究が積み重ねられてきても量子の正確な正体はまだ全面的に明らかにされてはいない。<sup>(25)</sup>

また共時性（シンクロニシティ）に注目する、心理学者ユングの説がある。<sup>(26)</sup>彼は自然界に、物理的な制限を超えた何らかの力によって起こされる現象が多く見られると言う。

彼の患者の心理状態が好転しかけているときに、必ずある珍しい昆虫が治療室に飛び込んできた彼自身の体験は、その一つであるとユングは言う。

こういったことが、共時性である。考え方によっては霊魂といった未知のものが、それを引き起こすのかもしれないということになる。

しかしこのような共時性は、将来になって科学的に説明づけられる現象であるのかもしれない。

自然を扱った哲学者及び科学者の間に、「神」(主、ヤハウエ)がつかる自然界は完全であるとする考えがある。

ゆえにかれらは、すべての自然現象は、数式で合理的に説明できるという。

しかし、不完全定理の中に、「すべての物理学の理論は完全なものだと証明できない」という説がある。脳機能学者の苦米地英人氏<sup>(27)</sup>は、そのような不完全定理を踏まえて、「完全な神」(主、ヤハウエ)は存在し得ないという。

不完全性定理を受け入れれば、不完全性定理から、現在の物理学が不完全であることはいえるかもしれない。しかし、将来において、不完全性定理を受け入れても、「神」(主、ヤハウエ)の存在を検証する新たな物理学がつくられる可能性を全く否定することはできない。

様々な形で、人間の宗教心を科学的に説明付けようとする試みが行われてきた。しかし宗教を全て社会的構成物とする、それとは全く反対の見方も可能である。

科学哲学の分野には、社会構成主義と呼ばれる一派がある<sup>(28)</sup>。それは、「科学の理論を自然界の真実ではなく、「その理論を作った科学者が、彼が生きる社会に迎合するために考えたかりそめのもの」であるとするものである。

現代人の目から見れば、天動説や量子論抜きの分子論などは、その時代に必要技術を作るために考えられた社会構成物のように思えて

くる。

「一神教が必要な社会の構成員は一神教を信仰し、多神教が合う社会の人間は多神教を信仰する」

このような単純な説明だけで、事足りるのかもしれない。

牧師の孫としてドイツの教会で育った青年が禅を学びに日本に來た後、兵庫県の安泰寺の住職になった例もある。十一人の白人が、彼のもとで修行して出家している<sup>(29)</sup>。

岡山県の曹源寺では、住職と副住職を除く十五人の修行僧すべてが外国人から成っている<sup>(30)</sup>。

このような外国人にとって、生まれた国の宗教の上に立つ社会より、禅僧がつくる社会が好ましいものだったのだろう。

今でも長崎県外海地区に隠れキリシタンが残っている<sup>(31)</sup>。かれらの先祖はポルトガル人のサン・ジワン神父の布教によってキリスト教徒になった。神父は西洋の有益な技術をあれこれ教えて、信者に尊敬されたという。

江戸幕府の禁教令によって、外海のキリスト教徒は隠れキリシタンにならざるをえなくなった。そして明治の初年にフランス人のド・ロ神父が布教に訪れると、かれらは改めてカトリックの信者となる集団と、隠れキリシタンのままでいる集団とに分かれた。

カトリックになった人間はカトリックの教会が、隠れキリシタンは日本化した教義にたつ隠れキリシタンの教会が居心地のよいものだったのだろう。

関東の人が西の市の熊手を、関西の人が十日戎の福笹を有難がるの

は、江戸時代の江戸と上方の気質の違いから来たものであるらしい。

新渡戸稲造はフィラデルフィアのクエーカー教徒の娘の氣に入つて、クエーカー教徒になつたとも考えられる。また小泉八雲は出雲の素朴な人びとにひかれて、彼らとともに神社の祭りを行ったのかもしれない。

縄文時代の日本人も、円の思想にたつかれたらの社会にもつとも合つた形で、神道という宗教をつくりだしたのであるまいか、ある種の共通の指向をもつ者が集まつて教団を作る。そしてその教団が作った社会に魅かれた者がその教団に入る。このような新参者の一人一人が、少しずつ教団を変えていく。宗教とはこのようなものであるうか。

## 五 神様のはたらきとは何か

筆者は神道以外の宗教にそれほど詳しくない。それゆえ以下の記述は、あくまでも「日本人がこれまでに神様についてどのように考えてきたか」の考察に限定したものとしたい。

合理的な立場から、これまで日本人が「神様のはたらき」と感じたことを私なりに分類すると次のようになる。

1. 自然の恵み（自然現象）
2. 思いもよらない形で受けた他者の助け
3. 潜在意識から得た有益な思い付き
4. その時代の知識で解明できなかった科学的現象
5. 真の不思議

日本人は土地を守る精霊を氏神様として祭り、春に豊作を願う祭り、秋に収穫を感謝する祭りを行つてきた。出雲大社は縁結びの神様として広く信仰された。素朴な人々は、稲は神様の恵みによつて育つと考へた。また仲人に良い相手を引き合わせて貰つても、それを神様の助けと感じた。日本の職人は自分の思い付きで新たな技術を編み出して、それを神様にもらつた知恵と考え、多くの人に無償で新たな技術を教えた。

雷雨が雷神のしわざとされていた例のように、不可解な現象が神のはたらきとされていた例も多い。現在でも科学的に未解明な事柄は多いが、科学がどこまで発展しても真の不思議は残るのである。それは神様の領域の事柄かもしれない。

江戸時代の日本人の神概念を知る上で興味深いものとして、『防府天満宮靈験記』<sup>(26)</sup>という文献を取り上げよう。それは、国学者で防府天満宮の下級の神職を務めていた鈴木高輅が、防府天満宮を信仰した人々からの聞き書きをもとに弘化四年（一八四八）にまとめたものだ。

そこには、四九件の天満宮の神様の助けを得た話が記されている。合理的に考えればその中の三三件が自然の恵み、一〇件が人の助け、四件が潜在意識の働きということになるのであろう。このほかに信仰心の篤い者が、勤勉な生活を送つてそこそこの成功を得た話が二件ある。次の話は自然現象を神様の恵みと考えた例である。

「天保元年、当国玖珂郡山代広瀬と云処の何某と云人、田に蝗<sup>イナムシ</sup>多く生じて稲絶んとしける故、急ぎ当社へ参詣し祈願を込御札守受かへり、田に立たる翌朝行て見る内、一向見訓ざる雀程の青き鳥群来りて悉く

蝗を啄尽したるよし、当社に仕奉る鈴木上総定秋が家に其人来りて物語しけりとぞ」

防府天満宮に祈願したおかげで害虫の難から逃れたというのだが、これはたまたま飛んできた雀の群れが害虫を食べた話のように思える。

現実的に考えれば、思いもよらぬ形で人の助けを得たことを記したとみられる、次のような話もある

「同く八（屋）代村の何某とか云者、先年当佐波郡三田尻塩浜へ持カセキに來り居ける内、常に当社を信仰して度々參詣をもしたりけるが、節季に吾家へ帰り年越せむと帰りがけ、大晦日の夜、彼大島郡渡り口遠崎といふ船場にて船を雇けるに、常は百文程にて渡しける処、今夜の事といひ、殊に風も少し強ければとて、船賃殊の外多く貪りける故、彼者遙々持ハルバルに行持帰る金僅ばかりなるを、今船賃如是多く出しては、家に帰り残る金子いかばかりもなく、妻子の手前も面目なしとは思へども詮方なく、既に船に乗るとしたる折しも、侍一人來り、急用なりとて役船を出させ、彼者を見付、其方は何者なるかと問ける故、事の様子を物語ければ、彼侍船子どもが非道の金を貪りけるを怒、賃錢におよばず予が役船に乗べしと云る故、彼もの大に悦び船に乘しが、程なく小松の浦に着船し、かの侍に厚く礼を演別クれんとしけるに、不思議なるかな、彼侍いつとなくかき消す如く失けるゆゑ、奇瑞の思ひをなし家に帰りしに、其夜の夢に、常々当社を信仰なしける故か、る難洪の場を人と現れ助け玉ふよし見たるよし、同郡の流田と云処の加賀屋坂次郎より聞り」

江戸時代の人間であつても、これを読んで「防府天満宮の神様が侍の姿になつて現れ、船まで用意して困っている人を助けたあと姿を消した」とまでは考えないであろう。江戸時代の素朴な人々は、自分が出来る範囲で人助けをする習慣を自然に身につけていた。また、他者を助けた後、すみやかにその場を離れるのも、粹な生き方に叶つた當時の礼儀であつた。この話の語り手が遠崎の渡し場で出会つた侍は、当たり前のことをして黙つて去つていったのである。

次の話は潜在意識のはたらきが、忘れていたことをふと思ひ出させたものとみてよい。

「文化年中当町大黒屋清兵衛同町武島政右衛門方より桑の山醍醐寺（宮市町より醍醐寺まで道程十四五丁ばかり有）に札銀壹貫目余懐にして矮狗チンを抱行しに、彼札銀を矮狗の蹴出したるをも知ず、寺の門前にて懐を探しみるに札銀なし、是はと驚きもとの道に馳帰、逢人毎に尋ねれども知ずとのみ答けり。此儘にて帰なば、若吾野心ありやと疑れんも無念なりと、途中にて当社の方へ向ひ厚く心願を込、又道を尋ぬるに、其頃稲の穂甚能登ヨクミノリて道に倒れけるを起さん為所々竹を立繩をを引回したるに人の手にては態としたりとて出来まじく、是みよと云ぬばかりに其繩の上にかゝりて有しとぞ。こは清兵衛直の物語なり」

寺に銀子を運ぶ道中で金を落とした人間が、道を引き返して銀子を探すうちに、ふと繩のあたりで何かを落としたかもしれないという考えが浮かんだという話であろう。

この次のものは、信仰の篤い人間が成功した話になる。

「同じ嘉兵衛云るには、吾甥ヲヒに同国佐伯郡木野村コノノに中屋平蔵と云者あり、二十年ばかり以前は殊ノ外貧窮に迫り、其日も立兼る程なりしが、当社を信仰し度々参詣をもなし、何卒一度出世すべく守らせ玉へと、一向ヒタスラに祈願なしけるが、今は程々の身上となり、田畠も多く求めたりと云り」

『防府天満靈験記』の靈験談の中の三分の二が、自然現象によるとみられる話であった点に注目したい。近代科学に触れる前の江戸時代の人びとは、まだ自然のはたらきを神の恵みと考え、それに感謝する素朴な気持ちを持って生きていたのである。

現代人の目から見れば自然現象や思いもよらぬ人の助けを思える出来事であっても、「靈験記」に出てくる人々にとっては神様の助けであった。このような場合に、私たちはどう考えるべきであろうか。

現代人の目には見えない「神様と呼ばれた何らかの力が『靈験記』の登場人物を助けた」

と言われても、それを否定することはできない。

また、ユダヤ教徒、イスラム教徒や一部のキリスト教の宗派の信者のように、はるか昔から今まで日本人から見れば厳しすぎる戒律を受け継いできた人々もいる。かれらをみて、私たち日本人はこのように考えたくなる。

「私たちに理解できない何らかの力が、かれらに戒律を守らせているのではあるまいか」

人間の歴史のなかで、「神」と呼ばれるものは、人間の理解を超える存在なのかもしれない。

私は、日本人が「神様」と呼んだものは人間の良心であると考えてきた。素朴な古代人は、自分の心の中にある人間や自然を大切にすることが、「神様」の指令と感じたのではあるまいか。<sup>(32)</sup>

このような発想は、前に上げた儒家神道の創始者、林羅山の考えに近い。

私は合理的な立場から神道とは、次のようなものだと云わざるを得ない。

「日本人にとって最も望ましい『和の心』に従った生き方を実現するために、私たちの先祖がつくった一つの思想」

しかしこの説明では、「神社にお参りして神様の存在を感じた」「神社で神様に知恵を授けられた」と主張する者に対する十分な反論にはならないのである。

## むすび

神道の信仰について、最も合理的に説明すると次のようになる。

「神社にお参りしたり、神棚を祭っているから、神様が助けてくれるわけではない。それは神様と触れて『きれいな気持ちで生きていこう』という決心を再認識する行為である。それができる者は、自然な形で立派な生き方をするようになり、それを見た周囲の人の思いもよらぬ助けを得られる」

これは神道の基本とされる「祓い」の考えを現代風に解釈したものである。神道は神社を参拝することも、毎朝の神棚のお祭りも、身体

と心を清める祓いだと説く。神道思想家が、神道について説明するときに好んで挙げる次の和歌も、本稿に記したような考えに近い。

「心だに誠の道に叶いなば 祈らずとても神や守らん」(伝菅原道真作、『菅大臣和歌集』より)

「神道―和の心」は、縄文時代の円の思想の流れをひく自然を大切にすることをたて、日本における科学技術の暴走に歯止めをかけてきた。日本の山は「神々のすむところ」とされたために、日本では山地や森林の破壊はすまなかつた。

「和の心」は日本思想の核をつくってきたが、終戦後に国家神道が否定されたあと神道は変質していった。アメリカ流の個人主義や拝金主義が広がり、地域の祭りはじわじわとすたれた。さらに近年の「技術の発展によって、人と人のつながりが急速に稀薄になってきた。日本の伝統的な「粹」の世界は、人と人のつながりの場で意味をもつものである。

一人で部屋にこもってパソコンで収入を得ている引きこもりが、いくらお洒落をしても粹とはいえない。

現在「国際化」を唱えて「日本人は西洋風の法や思想、習俗を見習うべきだ」と唱える者も増えている。しかし、「国際化が粹の文化を破壊する」と考え、日本独自の科学思想に執着して幕末の攘夷主義者のように外国人を退けるべきではない。これまで日本は他国から多くものを学び、今日のような便利な時代をつくりあげてきたのだから。

国際化の流れのなかで、私たちは「日本人が日本人であり続けるために欠かせない『和の心』の今後のあり方」を何度も思索せねばなら

ないのである。

本稿では神道を一つの科学思想と定義したうえで神道なるべく合理的に解釈しようと努めてきた。しかし、結論をいえば、これまで出されたどのような学問の成果を用いても、「神道は謎のまま」なのである。

今回の考察で科学の手法で宗教を研究した成果をできる限り多く紹介してきたが、その中に確実なものは一つもなかった。

本稿で「神様のはたらき」としたものの中の「5. 真の不思議」とすべき部分はあまりにも大きい。前にあげた『防府天満宮靈驗記』の防府天満宮に参拝して蝗の害を逃れた話は、合理的に考えれば自然現象とするほかない。

しかし、何か不思議な力が雀たちにははたらきかけたおかげで、雀が蝗を退治してくれたと考えることも可能である。現在でも、「神社に参拝したおかげで、思いもよらない助けを得た」という者は、少なくない。

「神道―和の心」にたつ筆者にとつて、「一神教はさらに不可解である。たとえばイスラム教徒は毎日、決まった時間にメッカの方向に向かって礼拝を行っている。イスラム教圏の町や村では、金曜の午後に必ず「モスクに来て礼拝を行なえ」という放送が流れる。この現象を知ると、このようにも考えたくなる。

「ムハンマドの時代から現在にいたるまで、私たち日本人の知らない大きな力が、多くのイスラム教徒にはたらきかけて礼拝を行わせているのではあるまいか」

世界のあらゆる宗教で、「神」とされるものはすべてが永遠の謎である。と筆者は考えている。科学がどこまで発展しても、「神様のはたらき」をすべて合理的に説明するのは不可能ではあるまいか。

註

- (1) 武光誠「日本の科学思想とその歴史の研究」(『カルチャー』11)
- (2)(3) 武光誠『日本誕生』(文芸春秋刊)
- (4) 武光誠「首長霊信仰と天皇の起源」(武光誠編『古代国家と天皇』、同成社刊)
- (5) 武光誠「神祇官と出雲国造神賀詞」(武光誠『増訂律令太政官制の研究』、吉川弘文館刊)
- (6) 武光誠「知っておきたい日本の神道」(角川学芸出版)
- (7) 武光誠「日本人なら知っておきたい武士道」(河出書房新社刊)
- (8) 平重道『日本思想大系』(岩波書店刊)の「神道伝授」による。
- (9) 武光誠「日本人なら知っておきたい所作の「型」」(青春出版社刊)
- (10) 鈴木英夫『森林の思考、砂漠の思考』(日本放送出版協会刊)
- (11) 武光誠『「宗教」で読み解く世界史の謎』(PHP研究所刊)
- (12) 「人間は脳細胞の数と脳細胞のつながり方の数とを掛けた数の組み合わせの一つに従って行動すると説く総合情報理論」(理化学研究所脳数理研究チーム『意識の統合情報理論』など)もある。
- (13) 大谷悟『心はどこまで脳にあるか』(海鳴社刊)
- (14) マーカス・レイウル『脳を観る』(日経サイエンス社刊)
- (15) デイヴィッド・イーグルマン『あなたの知らない脳』(ハヤカワ書房刊)
- (16) ポール・ザック『経済は「競争」では繁栄しない』(ダイヤモンド社刊)
- (17) ジェシー・ペアリング『ヒトはなぜ神を信じるのか』(化学同人刊)
- (18) 石川幹人『超常現象』を本気で科学する』(新潮社刊)
- (19) リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』(紀伊国屋書店刊)
- (20) トーマス・ディラン『科学と宗教』(丸善出版刊) 参照。
- (21) ジェームス・ファロン『サイコパス・インサイド』(金剛出版刊)

- (22) ロジャー・ペンローズ『ペンローズの(量子脳)理論』(筑摩書房刊)
- (23) 竹内薫『不完全性定理とはなにか』(講談社刊) 参照。
- (24) 治部眞理・保江邦夫『脳と心の量子論』(講談社刊)
- (25) 超心理学の研究者ディン・ラディンは「量子の宇宙からみあう心たち」(徳間書店刊)さまざまな予感実験をおこなったうえで、超常現象を量子論と関連付けている。量子は精妙な方法で絡み合っており、そのことがテレパシー(読心術)などの超常現象を起こしているというのだ。超常現象の研究者でラディンの説を評価する者も多い、しかし私は量子の世界の未解明な部分が明らかにならない限りすぐさまラディンの推測に従うべきではないと考えている。
- (26) ユング・パウリ『自然現象と心の構造』(海鳴社刊)
- (27) 苦米地英人『なぜ、脳は神を創ったのか?』(フォレスト出版刊)
- (28) ラトゥール・ウルガー『科学が作られているとき』(産業図書刊)
- (29) ネルケ無方『迷える者の禪修行』(新潮社刊)
- (30) 『朝日新聞』デジタル版二〇一二年二月二日号
- (31) ロジェ・ヴァンジュ・ムシン『村上茂の生涯』(聖母の騎士社刊) 参照。
- (32) 『防府史料』第二十六集(防府市教育委員会刊) 鈴木高鞆の『防府天満宮霊験記』は、林羅山の『神道伝授』の二〇〇年余り後の著作にしては合理性を欠くようにも思える。しかし筆者の家は、祖父の代まで高鞆の子孫とつながりがあり、筆者は高鞆が出鱈目な創作を書く人間でないことも理解している。
- (33) 武光誠『日本の神々を知る神道』(青春出版社刊)

